

博士論文

アンリ・ベルクソンにおける神秘主義

— 〈事実の複数線〉 〈創話機能〉 〈機械〉 —

Le Mysticisme chez Henri Bergson

: « lignes de faits », « fonction fabulatrice », « machines »

指導教授

澤田 直 教授

文学研究科フランス文学専攻

平賀 裕貴

博士論文 目次

<u>序論</u>	p. 3
<u>本論</u>	
第1章：神秘主義というエニグマ	
——第1節 20世紀前半期フランスにおける神秘主義研究の諸相	p. 9
——第2節 ベルクソンにおける神秘主義との遭遇	p. 38
第2章：〈事実の複数線〉と神秘家、そして記憶としての〈生き延び〉	
——第1節 哲学的方法としての〈事実の複数線〉	p. 66
——第2節 記憶としての〈生き延び〉と記憶の伝播	p. 94
第3章：〈創話機能〉と神秘家	
——第1節 〈創話機能〉あるいは語り之力	p. 119
——第2節 〈創話機能〉のイメージとシンボル	p. 144
第4章：〈機械〉と神秘家	
——第1節 「暗夜」にうごめく〈機械〉	p. 169
——第2節 戦争する〈機械〉と「魂の代補」	p. 192
<u>結論</u>	p. 219
<u>Bibliographie</u>	p. 228
<u>仏文要約</u>	p. 244

博士論文要約

本論文では、アンリ・ベルクソン (Henri BERGSON, 1859-1941) の『道徳と宗教の二源泉』(Les deux sources de la morale et de la religion, 1932. 以下『二源泉』と略記) で集中的に論じられた神秘主義について検討を加えることで、これまで十分には検証されなかったベルクソンの神秘主義の全体像を把握することを試みた。

第1章第1節では、19世紀末から20世紀初頭のフランスにおける神秘主義研究の流れを確認した。その結果、心理学、哲学、神学、文化人類学といった学問領域をまたいだ数々の神秘主義研究が、20世紀前半期のフランスでひとつのトポスを形成していたことが浮き彫りになった。

神秘主義をめぐる当時の言説のなかには、ベルクソンが神秘主義を考究する際に彼自身も主題としたものが少なからず存在していた。たとえばジェイムズ (William JAMES, 1842-1910) やドラクロワ (Henri DELACROIX, 1873-1937) の研究は、神秘経験を理性の眼差しで検討可能であることを明らかにした。翻ってこうした検討は、知性の自明性を突き崩すことにもつながりかねず、内的経験に基礎を置く神秘主義は、ベルクソン自身の知性との対決を後押しするものとなった。

第1章第2節では、ベルクソンの神秘主義研究の筋道を追うことに専念した。ベルクソンもジェイムズやドラクロワに影響を受け神秘主義研究を開始し、同時代の神秘主義研究者と並走しながら、独自の解釈を進めた。彼にとって神秘主義へと接近する契機となったのは、従来、講演「心身並行論と実証形而上学」で発せられた「もし仮に神秘主義を内なる深遠な生命へのある種の呼びかけと解するなら、その場合はあらゆる哲学は神秘主義的なものでしょう」という彼自信の言葉だったと言われている。この発言から出発し、神秘家へと次第に歩を進めていったなかで、彼の思考が「呼びかけ」をいかなる者が発するのかと問いに収斂していく点を提示した。

決定的な契機となったのは、『創造的進化』で論じられた神の存在である。神を動的な創造と同一視したベルクソンは、イエズス会士トンケデク (Joseph de TONQUÉDEC, 1868-1962) らの批判を受けた。再度神の問題を掘り下げるべく、彼は神秘家の研究に本格的に乗り出した。そこでベルクソンが神秘主義研究の入り口にしたのが道徳の問題だった。

第2章第1節では〈事実の複数線〉という概念を扱い、この概念が明らかにする生命の運動としての真理は、ベルクソンにとって神秘家によってこそ伝達されるという点を論じた。

〈事実の複数線〉は複数の経験から延長した各線が焦点を結び、その焦点において真理が獲得されるという思考方法である。当初この方法は、精神と身体がどの点で結びつき、どの点で離反するのかと探るものだった。その後ベルクソン哲学の中心は生命論へと移り、そして生命にまつわる議論で俎上に載せられたのは、ある特性をもった人間だった。つまり、人間という心身を備えた存在のなかでも、精神の豊かな創造性を維持する者が重要なのである。

ベルクソンはその人物を「モラリスト」と呼んだ。「モラリスト」は「新たな道」を切り開く者であり、われわれに「生命原理」を経験させると語られた。そしてベルクソンにとって重要なのは、「生命原理」のような根源的な真理は、それを経験した人物によってしか、われわれに伝えられないという点である。『二源泉』では「モラリスト」は後景に退き、代わりに神秘家が決定的な役割を担わされる。

第2章第2節では考察を加えたのは、〈事実の複数線〉によりベルクソンが証明を試みた、神秘家の魂が死後も残存するという〈生き延び〉という概念だった。なぜ彼が〈生き延び〉が可能だと考えるのかと言えば、身体に対する精神の独立を彼が確信しているからだ。こうした思考から導き出されたのが、精神は記憶となり存続するという本論文の主張である。ベルクソンにとって記憶は身体を必要としないゆえに、記憶そのものの存続がここでは主張されていると考えられる。つまり、支える身体および物質を必要としない、記憶の〈生き延び〉である。

そしてベルクソンは、存続した神秘家の記憶は「人類の記憶」のなかに堆積すると語った。また、「人類の記憶」のなかの神秘家にまつわる追憶は、われわれの各人により想起可能だと彼は告げる。「人類の記憶」という共通の平面において、ひとびとは神秘家という傑出した者たちの記憶に接触することができるのだ。なぜベルクソンがこのような想起の構造を思い描くかといえば、神秘家が神秘経験のなかで見出した生命の源泉は、その経験が「再生」され伝播されることでしか人類に届かないからだ。そして記憶が共通項になりえるのは、個々人の身体から離脱した記憶をベルクソンが措定しているからである。

このように考えれば、「人類の記憶」も、『物質と記憶』に始まるベルクソンの記憶論の重要な帰結のひとつだと言える。つまり、ベルクソンの記憶論は単に『物質と記憶』内だけで構築されるのではなく、たしかに『二源泉』においても独自の展開をみせている。それゆえ、ベルクソンの記憶理論の全体像を研究するためには、『二源泉』での神秘家に関わる記憶の思考を追う必要がある。

第3章第1節で論じたのは、ベルクソンが語る〈創話機能〉の特徴である。「人類の記憶」における神秘家を「イメージ」として蘇らせることは、いかなる方法で可能となるのか。そこで鍵となったのが、〈創話機能〉である。本論文が考察の糸口に据えたのは、「動的宗教は創話機能が提供するイメージとシンボルによってでなければ拡散しない」というベルクソンの言葉である。そこから、この「イメージとシンボル」に絞り、第3章第2節で議論を進めた。

ベルクソンの「イメージ」論が全面的に展開されたのは『物質と記憶』だったが、『二源泉』の「イメージ」の形態は『物質と記憶』から直接導き出されたものではない。われわれは『笑い』で語られた生命に比される「想像力」、そして『創造的進化』で生命進化のように分岐する「人格」を順に確認し、神秘家の人格が「イメージ」として把握される過程を追った。

次に〈創話機能〉の「シンボル」について、講演「形而上学入門」で述べられた認識における「シンボル」の役割を参照した。ベルクソンにとって「シンボル」は、対象を代替する記号や言語だった。人間は通常の認識の場合、対象そのものではなく「シンボル」を認識している。とりわけ〈創話機能〉を論じる際に、重要なのは「言語」としての「シンボル」だった。それに応じるかのように『二源泉』で、神秘家が自身の経験を表現する際の言葉に焦点が当てられる。神秘家が「とりわけ表現不可能なものをいかにして表現するのか」とベルクソンは疑問を呈する。神秘家は、ときとして神や愛を表現する際矛盾し合う言葉を使う。ベルクソンにとって、本来動的である創造性や感動を静的な言語によって表現する際に、矛盾は必然的に生じるものだ。むしろそうした矛盾のうちで、言語は習慣的な使用から解放され、創造性や感動を帯びた当初の経験が反映されたものになる。このように〈創話機能〉の「イメージ」である人格と「シンボル」である言語は、渾然一体となり神秘家の声となり、「呼びかけ」となって神秘家の模倣者のもとへ届けられる。

第4章では、ベルクソンが同時代の社会状況へと神秘家を適用させる際に現れる問題について論じた。産業が機械化されることで、社会全体が尽きせぬ欲求へと進む当時の社会情勢を彼は分析した。道具であるところの〈機械〉は人間の身体の延長となる。身体の機械的延長が過剰になると、その身体を埋める新たな魂が必要になるとベルクソンは語る。その際「魂の代補」が待望されると彼は説く。「魂の代補」という言葉について、そして機械化された社会が、神秘家によってどのような方向へと導かれていくのかについて、ベルクソンは多くを語らない。それゆえ、第1節では『創造的進化』の「眼という機械」をめぐるベルクソンの考察と、『二源泉』における十字架の聖ヨハネの神秘体験についての記述を手がかりに、この「魂の代補」を解釈した。

『創造的進化』でベルクソンは、「眼という機械」がもつ極めて複雑な細胞組織と視覚の単純性との対照性に注目した。そこから生命進化の役割を導き出したベルクソンは、細胞の集合が機能をつくるのではなく、細胞の集合は機能がつくられた痕跡であると結論づけた。こうした考察を手がかりに、ベルクソンは十字架の聖ヨハネの「暗夜」と呼ばれる神秘経験を本論文では分析した。神秘家は「暗夜」のなかで、「組み立て途中の機械」のように身体とあちこちが取り替えられ修理されるような苦痛を味わうとベルクソンは述べる。しかし、そうしたプロセスを経て、神秘家は単純に「ものをみる」ことになる」と彼は記した。つまり、「眼の機械」の対照性と同様に、まず複雑な諸段階で構成される経験があり、その後単純な視野が開けるのである。

第4章第2節では、こうした議論を参照しながら、〈機械〉によって拡大した身体を埋める「魂の代補」を論じた。ベルクソンによれば、〈機械〉により複雑化した身体に惑わされることのなく、ひとは「魂の代補」による単純な視野をえる。機械化は人間に盲目になることを強いて、尽きせぬ欲求へと従属させる。しかし、神秘家によって生命の源泉に触れるように誘われた人間は、物質的欲求の複雑さに執着することなく、単純に「ものをみる」こと

へと向かうとベルクソンは考えたと解釈した。

以上の考察を経ることで、ベルクソンがどのように神秘主義を自らの哲学へと組み込み、そして発展させていったのかを検討した。そして、まさに神秘主義こそが、ベルクソン哲学の欠くことのできない部分を形成していると結論付けた。